

備えは

あるか

7・19 飯塚水害10年

⑤

テレビ画面に映し出され、情報も提供できるようにした遠賀川流域図の一部が真たい」と張り切る。

九州工業大情報工学部 抗大会のレスキューロボット製作チーム「R.O.D.E.P.」がまた記憶に新しい昨年2月に発足。部員12人が駆動系、回路、ソフ

開発のきっかけは2010年7月に飯塚市で体験した豪雨だった。携帯電話は不通になり、公共交通機関も止まった。「台湾から移り住んで2年、あんな雨は初めて。とにかく驚いた」。

河川情報を公開している河川事務所のHPは、分かりづらいと倉さんは感じていた。「スマートフォン(多機能携帯電話)などに地図形式で表示できたら、多くの人たちに素早く情報を伝えられる」。研究テーマに決め、3年かけてシステムを完成させた。

今は一般向けに公開できるように河川事務所と交渉中だ。「将来は福岡市の河川

研究を進める。部長の河島晋さん(4年)は「被災地で活躍できるロボットを作るため、知識と技術を積み重ねている」と熟く語

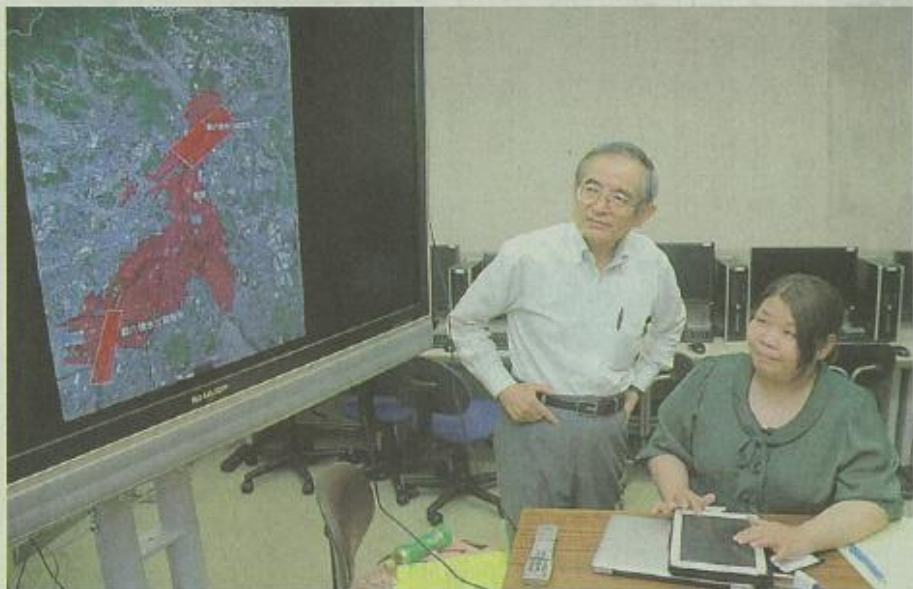
サークルは今年5月上旬、東京で開かれた大学対抗大会のレスキューロボット部門に出場した。地震などでがれきりの中人が生き埋めになったという想定。凹凸のある道を遠隔操作や自動運転でロボットに進ませ、搭載したカメラやマイ

躍できるロボットの開発を後押しする環境も整いつつある。県と北九州市、福岡市は08年11月、国から一口

振興会議事務局の原新産山比佐雄事務局長は「被災時などに住民が大学の研究成果を有効活用できる仕組みが必要」と提言する。過去の災害の苦い経験や記憶を糧にした筑豊発の新たな技術に、期待が膨らむ。

筑豊発の新技术に期待

理系の頭脳集積



遠賀川の浸水情報を知らせるシステムを作った近畿大産業理工学部の研究生、倉官濃さん(右)



九州工業大情報工学部のロボット製作サークル「R.O.D.E.P.」ロボットの性能向上に取り組む

レスキューロボット。災害後に救助が必要な人を見つけて救助したり、倒壊した建物のがれきを撤去したりする。東京電力福島第一原発の事故後、建屋内に千葉工業大や東北大が開発したロボット「クイーン」が投入され、情報を収集した。東日本大震災を教訓に経済産業省は昨年度、約10億円をかけて災害対応無人化システム研究開発プロジェクトに取り組んだ。人が近づけない現場で特殊チームによる高所作業ができるロボット、原発の施設内で線量調査をするロボットなどを開発。民間企業に貸し、機能的性の向上などを図る。

「おわり(吉田修平が担当しました)」